

日経産業新聞

2017年(平成29年) 3月17日 金曜日

建設支援業務を手掛ける大建(福岡市)が雨水をためて中水として利用するシステムの普及に挑んでいる。地元の大学と共同で開発した仕組みで、目指すのは「時間がたつても資産価値が落ちにくい住宅地」。松尾憲親社長(47)は同システムを前面に出して、公共事業頼みからの脱却を進める。

転機は先代社長の父親から会社を継いで約10年がたった頃に訪れた。経営者の勉強会で米国に出張したときだ。視察先のノースカロライナ州が宅地の整備を進めることで、多発していた犯罪を減少させることに成功した事例を知った。「こういう住宅地をつくりたい」。松尾社長は直感した。

大建は1974年の創業以来、公共事業に伴う土地買収や移転する権利者への補償に関する業務を手掛けてきた。会社を継いだ松尾社長が営業で役所を回ると同業者の名刺が積まれており、その数で受注が決まるような雰囲気があったという。「人脈だけでなく、仕事自体が認められる事業を手掛けた」と漠然と考えていたところ公共事業批判も高まり「仕事が減るかもしれない」という不安が募っていた。

雨水利用の宅地普及へ

大建社長

松尾 憲親氏

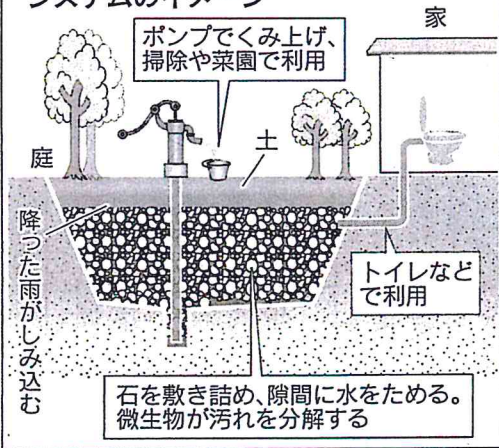


ただまずは成果を出そうと主力事業に専念。2006年ごろに国土交通省九州地方整備局の管轄内内で受注件数が年間1位になった。「新規事業を

公共工事依存から脱却

考えるタイミングがきた。松尾社長はビジネスの種を探し始めていた。視察先の米国から日本に戻った松尾社長は宅地開発への参入を決断。準備を進めて12年に発売にこぎ着けたのが、環境への配慮を打ち出して開発した福岡県糸島市の住宅地「荻浦(おぎのうら)ガーデンサバール」だった。糸島市は福岡市のベッドタウンとして人気が高

大建が九州大学と開発した雨水の貯蔵システムのイメージ



えを色濃く反映している。九州大学と共同で開発した雨水貯蔵システムは地面に掘った穴に遮水シートを張って砂利を敷き詰め、その隙間に水をためる仕組み。自然にある素材を多く使ったため、樹脂やコンクリートを使う工法に比べ低コストで簡単に設置できるという。荻浦ガーデンサバールでは庭の地下にこのシステムを設け、手押し式のポンプで水をくみ上げて植物の育成や掃除に使ったり、トイレなどの生活用水として利用したりしているという。「住民同士の交流を促す仕掛けにもなっている」と松尾社長は説明する。

トップの挑戦

まつおのりちか 1993年西南学院大法律卒。エヌケーケートレーディング(現JFE商事)を経て、98年に父の後を継ぎ大建の社長に就任。2012年に環境配慮型の宅地を開発する。

松尾社長は誇らしげだ。ファミリー層だけでなく、音楽プロデューサーやフィットネスの講師など様々なライフスタイルの人が住む。先代社長の「庭に囲まれるような家」に実現した。荻浦ガーデンサバールには地上2階、地下1階がある。「庭で子供を安心して遊ばせられると住民に評価されている」という松尾社長の考

(香月夏子)